

【授業科目】微生物検査学実習 I Practice of Laboratory Microbiology I

担当教員	開講年次	選択必修	単位数	時間数	授業形態	実務経験	オフィスアワー	教職員への授業公開
森 啓至、井上 孝	2年次前期	必修	1	30	実習	あり	巻末掲載	可
授業概要 (内容と進め方)及び課題に対するフィードバック方法	<p>授業概要／微生物学、微生物検査学I、微生物検査学IIの講義で学んだ基本的知識をもとに、微生物学検査法として必要な微生物取り扱いの基本操作、主要な病原菌の同定方法について教授する。その中で菌の同定に重要な分離培養技術、培地の使用法と判定法、系統的な同定の進め方を実習する。また、臨床現場で汎用される同定キットについて、その利点と正しい使い方を講義する。さらに本実習では、微生物検査学実習IIにつなげるための基本技術を身に付けて欲しい。*実務経験を持つ教員が授業を進める。</p> <p>課題に対するフィードバック方法／提出されたレポートにコメントをつけて返却する。適宜実施する課題については模範解答を解説する。</p>							
授業の位置づけ	<p>本学のディプロマ・ポリシー①「臨床検査の専門性と責務を自覚するとともに、地域に住むあらゆる健康レベルの人々に専門的知識と技術に基づき臨床検査を実践できる。」の達成に寄与している。</p>							
到達目標 (履修者が到達すべき目標)	<p>① 微生物学で学んだ知識を基に微生物の取扱い方、滅菌・消毒方法について説明と実践ができる。 ② 培地の作製、分離培養、確認培養方法などの基本操作について習得する。 ③ 臨床微生物学で学んだ各種細菌の分離培地上の集落の観察ができる。 ④ 各種細菌の同定および薬剤感受性試験ができる。</p>							
時間外学習に必要な学修内容および学習上の助言	<p>事前学習：これまで学習した微生物を検体別に分類し、使用する培地、生化学的性状を復習し実習に臨むこと。(60分) 事後学習：実習後はレポートをまとめて提出することで実習内容を復習する。(90分)</p> <p>※上記時間については、指定された学習課題に要する標準的な時間を記載してあります。日々の自学自習全体としては、各授業に応じた時間(2単位15回科目の場合：予習+復習4時間/1回)(1単位15回科目の場合：予習+復習1時間/1回)(1単位8回科目の場合：予習+復習4時間/1回)を取るよう努めてください。詳しくは教員の指導に従ってください</p>							
授業計画	<p>第1・2回 実習概要と細菌を扱う上での注意点の説明、培地作成</p> <p>第3・4回 グラム陽性菌、陰性桿菌の分離培養</p> <p>第5・6回 コロニーおよび溶血の観察、グラム染色、確認培地の作成</p> <p>第7・8回 グラム陽性球菌の同定、薬剤感受性試験</p> <p>第9・10回 グラム陰性桿菌(腸内細菌)の同定 薬剤感受性試験</p> <p>第11・12回 グラム陰性桿菌(腸内細菌)の同定 薬剤感受性試験</p> <p>第13・14回 グラム陰性桿菌(腸内細菌)の同定 薬剤感受性試験</p> <p>第15回 実習確認試験 まとめ</p>						<p>1回～14回：森 15回：井上</p>	
評価方法 評価基準	<p>成績は以下の評点配分によって総合的に判断する。 実習ごとのレポート20% 実習試験40% 定期試験40%</p>							
教科書	微生物検査学ハンドブック(三輪書店) 実習プリント(配布)			参考書等		『微生物検査ナビ第2版』栄研化学 『微生物検査学 実習書』医歯薬出版		
学生へのメッセージ	<p>・病原微生物を扱っていることを十分認識し、諸注意を守って実習する。実習に際しては体調を整えて感染防御に努める。実習の前後では手洗いを確実にすること。 ・菌の準備、実習日程の都合により予定を変更する場合がある。</p>							